

長野県千曲市

屋代遺跡群 城ノ内遺跡 8

— 長野電子工業(株)工場増築に伴う発掘調査報告書 —

2007

千曲市教育委員会

第1章 調査の概要

平成18年3月13日、長野電子工業（株）より、工場の建設工事を計画している旨連絡があった。

当該事業は、平成14年度に長野電子工業（株）工場建設に伴い発掘調査を実施した工場への増築工事であり、現地表下約1mで埋蔵文化財が確認されている。

平成18年4月12日、文化財保護法第93条に基づく届出が提出され、4月27日に事業者と遺跡の保護について協議を実施した。その結果、発掘調査を実施して記録保存を図ることとし、発掘調査は平成18年5月中に実施することとなった。

平成18年5月2日、長野電子工業株式会社 代表取締役社長 市川和成と千曲市長との間に埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結され、5月15日より発掘調査を開始し、6月2日、現場における調査を終了した。

- | | |
|----------|---|
| 1 調査遺跡名 | 屋代遺跡群 城ノ内遺跡（千曲市遺跡台帳 No. 31-7 調査記号 SRN 8） |
| 2 所在地 | 千曲市大字屋代字城ノ内1351番地 ほか |
| 3 土地所有者 | 長野電子工業株式会社 代表取締役社長 市川和成 |
| 4 調査原因 | 長野電子工業（株）工場増築に伴う当該遺跡の記録保存 |
| 5 事業委託者 | 長野電子工業株式会社 代表取締役社長 市川和成 |
| 6 調査の内容 | 発掘調査 約120㎡ |
| 7 調査期間 | 発掘調査 平成18年5月15日～平成18年6月2日
整理調査 平成18年6月5日～平成19年3月30日 |
| 8 調査費用 | 1,000,000円 全額事業者負担 |
| 9 調査受託者 | 千曲市長 宮坂博敏 |
| 調査主体者 | 千曲市教育委員会 |
| 事務局 | 文化課文化財係 |
| 調査担当者 | 文化財係 小野紀男 |
| 調査参加者 | 青木重治・小林直文・島田茂人・高野貞子・竹之内常秋・中村文恵・
間嶋今朝男・宮澤満希男・柳澤君雄・米沢須美子 |
| 10 種別・時期 | 集落跡 古墳時代～中世 |
| 11 検出遺構 | 竪穴住居跡4棟・土坑3基・溝跡3基・ピット6基 |
| 12 出土遺物 | 土器片 弥生時代～中世 コンテナ2箱 |

調査日誌

平成18年5月15日（月）表土掘削開始	5月24日（水）2号住居跡よりカマド検出
5月16日（火）検出作業開始、機材搬入	5月25日（木）全体写真撮影、下層へ掘り下げる
5月17日（水）住居跡検出	5月29日（月）作業員本日で終了、実測作業を進める
5月19日（金）1号住居跡より石組カマドを検出	5月30日（火）実測作業終了、機材撤収
5月22日（月）基準点測量実施	6月2日（金）掘め戻しを終え、現場作業終了

第2章 遺跡の環境

城ノ内遺跡は、海拔356m付近、長野県千曲市大字屋代字城ノ内地籍、北緯36度32分58秒、東経138度8分16秒に位置し、千曲川の氾濫によって形成された自然堤防上に展開する屋代遺跡群として把握されている。

屋代遺跡群は、東西約3km、南北約1kmを測る、千曲市内屈指の縄文時代から中世・近世に至る大遺跡群である。遺跡群では、上信越自動車道建設に伴う発掘調査が長野県埋蔵文化財センターにより実施され、地表下約4mから縄文時代中期集落の検出や、同府木簡をはじめとする多量の木簡や祭祀遺物が出土し話題となった。

城ノ内遺跡では、昭和32年に旧屋代町が発掘調査を実施して以降、十数回の発掘調査が行われており、弥生時代中期から平安時代にかけての多数の住居跡が確認されている。平成18年度においても、本事業に伴う発掘調査と併行して、都市計画道路一重山線建設に伴う発掘調査が実施されている。また、「城ノ内」の字名が示すとおり、中世には居館があったとされ、城ノ内遺跡から東側に隣接する大塚遺跡にかけて、一辺100mほどと推定される方形の堀跡が確認されている。

発掘調査は、平成14年度に発掘調査を実施して建設した工場の増築工事に伴うものであり、その調査成果から、主として平安時代の集落跡が検出されると想定された。



1 城ノ内遺跡 2 大塚遺跡 3 馬口遺跡 4 町場遺跡 5 生仁遺跡

第1図 遺跡位置図 (1:20,000)

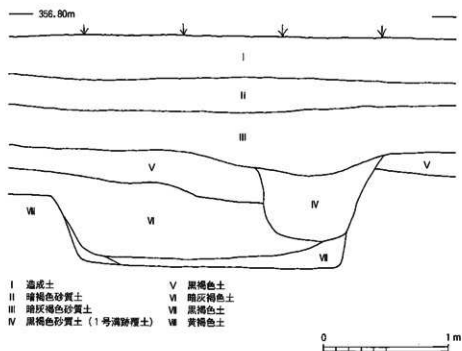
第3章 遺構と遺物

第1節 調査の成果

調査により検出した遺構は、竪穴住居跡4棟、土坑3基、溝跡3基、ピット6基である。調査範囲の幅が4m程度と狭く、また攪乱により破壊されていた部分があったため、土坑、ピットを除き、完掘できた遺構はない。竪穴住居跡は出土した遺物などから、1棟が古墳時代、3棟が平安時代に属するものと考えられる。土坑、溝跡は出土遺物や覆土の状況から、中世に属すると考えられるものも検出している。また、ピットについては検出した層位が深く、平安時代以前にさかのぼる可能性もあるが、出土遺物がわずかであるため、はっきりとしない。

基本層序 (第2図、図版1)

調査地は工場用地として造成されており、東側の道路から西側に向かって上がっている。Ⅰ層は厚さ30cm前後の造成土。Ⅱ層は暗褐色砂質土であり、造成前の畑の耕作土であると考えられる。Ⅲ層は暗灰褐色砂質土で、わずかに遺物の包含が認められる。Ⅳ層は黒褐色砂質土で、1号溝跡の覆土となる。Ⅴ層は黒褐色土で、遺物を多量に含む包含層である。Ⅵ層は遺構確認面となる暗灰褐色土であり、3号住居跡の覆土となる。Ⅶ層は3号住居跡床面上に堆積した黒褐色土である。Ⅷ層が黄褐色土の無遺物層となり、地山面とした。ピット群はこの黄褐色土まで掘り下げて検出したものである。地表面から遺構確認面までは調査区の東側で約80cm、西側で約1mを測る。



第2図 基本層序 (1:30)

第2節 竪穴住居跡

1号住居跡 (第4～6図、図版2・5・6)

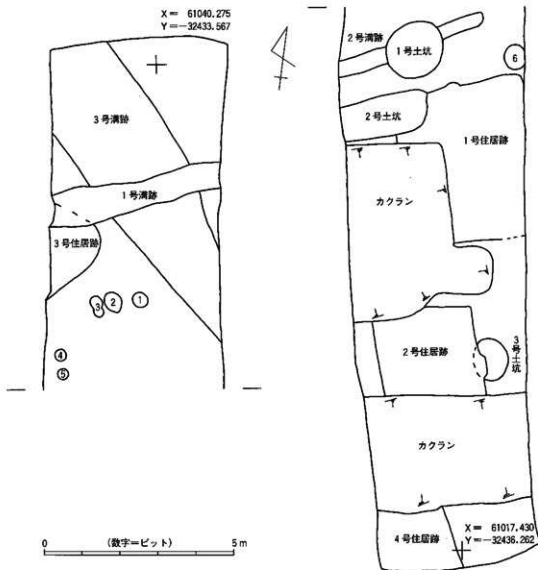
規模：3.70m×4.10m 平面形：隅丸方形 主軸方向：N-20°-W

新旧関係：2号土坑より古

床面：ほぼ平坦であり、全面にわたり顕著に明き繕められていた。

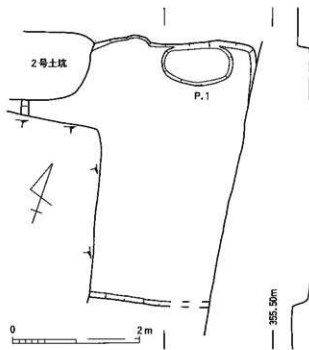
壁：立ち上がりにはやや角度が認められ、最大壁高25cmを測る。

カマド：北壁の中央部分より検出。石組みのカマドであり、板状の石材を2枚並べて袖としており、やや小ぶりの石材と須恵器鉢の破片(第6図9)を重ねて天井部としている。火床は直径約30cmのほぼ円形であり、非常に硬く焼け締まっていて、前面には炭化物が広がっている。煙道は攪乱による削平のため検出できなかった。また、カマドの東側より灰捨て穴と考えられるビットを1基検出している。遺物：カマドの周辺を中心として、まとまった量の遺物が出土している。1～3は土師器片である。いずれも内面黒色処理され、底部はヘラケズリ、体部外面はロクロナデにより成形される。また、1

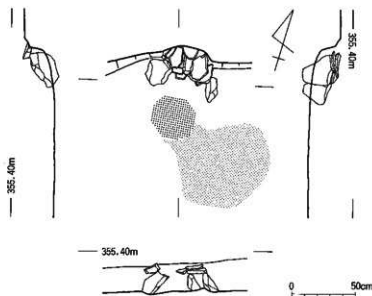


第3図 調査区全体図 (1:100)

には高台の剥離痕が認められる。4は土師器鉢であり、直径22.6cmを測る。体部下半をヘラケズリ、上半をログロナデによって成形する。5、6は須恵器環であり、いずれも底部には回転糸切痕が残っている。また、5の口縁部は強くログロナデされている。7、8は土師器甕である。7は小形甕で、外面にはカキメが施されている。8は大形甕であり、内外面共ログロナデにより成形される。9はカマドの天井部に用いられていた須恵器鉢である。体部の下半と底部を打ち欠き、板状にしてカマドの構築材としていた。10は黒色土器皿の破片であり、外面に刻書が認められる。11、12は鉄製品であり、その形状から鉄鎌であると考えられる。



第4図 1号住居跡 (1:60)



第5図 1号住居跡カマド詳細図 (1:30)

2号住居跡 (第7図、図版3)

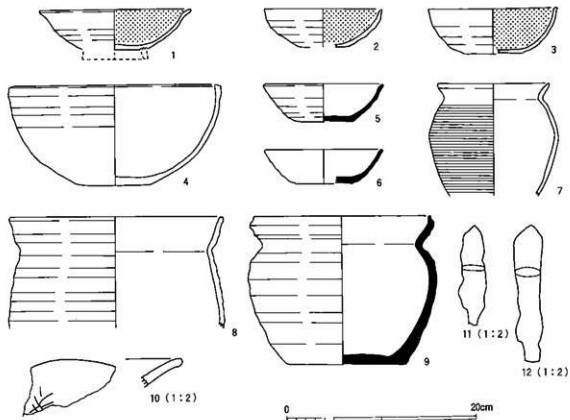
規模：2.70m× 平面形：方形 主軸方向：N-70°-E

新旧関係：3号土坑より新

床面：やや凹凸があるもののほぼ平坦であり、全面にわたり顕著に叩き締められていた。

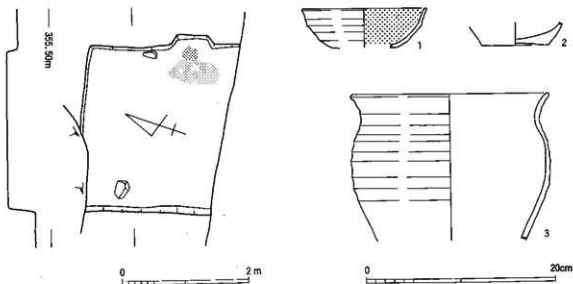
壁：立ち上がりは垂直に近く、最大壁高45cmを測る。

カマド：東壁の中央より検出。石の使用は確認されず、焚口部分が20cm程度住居跡の外側に突出している。火床の前には炭化物が広がっている。煙道は削平により検出できなかった。



第6図 1号住居跡出土遺物

遺物：出土遺物はそれほど多くない。1は土師器環であり、内面黒色処理される。底部には回転糸切痕が残っており、外面はロクロナデにより成形される。2は土師器甕の底部であり、回転糸切痕が残されている。3も土師器甕である。体部上半はロクロナデ、下半はナデにより成形される。口頸部は緩やかにくびれ、口縁端部は玉縁上に肥厚している。口縁部径23.2cm、体部最大径21.2cmを測る。この他に須恵質の土鎌が1点出土している。



第7図 2号住居跡及び出土遺物

3号住居跡（第8図、図版3・6）

規模：不明 平面形：隅丸方形 主軸方向：N-35°-E

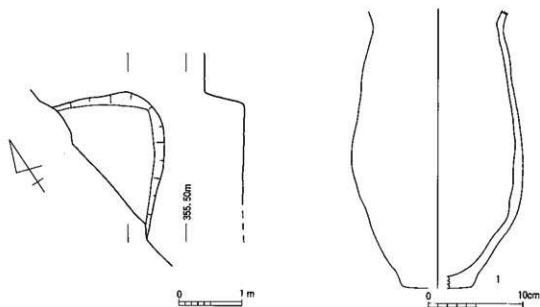
新旧関係：1号溝跡より古

床面：ほぼ平坦であり、黄褐色粘土を貼った顕著な貼床であった。

壁：立ち上がりにはやや角度が認められ、最大壁高100cmを測る。

遺物：住居跡の西隅を検出しただけであり、出土量は少ない。1は土師器甕である。底部には網代痕が残されており、体部は細長く内外面共ナデによって成形される。現存高29.7cmを測る長胴の甕であり、古墳時代後期のものと考えられる。

本住居跡は、他の住居跡と主軸方向に大きな差が認められること及び、出土遺物から古墳時代に属するものと考えられる。



第8図 3号住居跡及び出土遺物

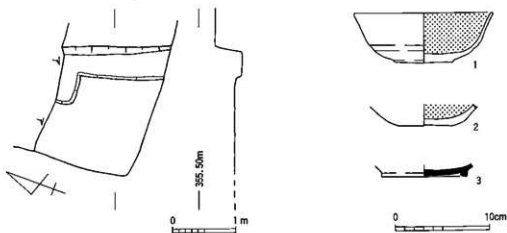
4号住居跡（第9図、図版3・6）

規模：不明 平面形：方形 主軸方向：N-70°-E 新旧関係：なし

床面：ほぼ平坦であり、顕著に叩き締められていた。

壁：住居跡の東壁の一部を検出しただけであり、西及び南側は調査区外となる。立ち上がりにはやや角度が認められ、最大壁高30cmを測る。また、壁際よりL字状に屈曲する周溝を検出している。

遺物：住居跡の東隅を検出しただけであり、出土量は少ない。1、2は土師器杯である。いずれも内面黒色処理されており、1の底部はヘラミガキ、2の底部はヘラケズリにより調整される。3は須恵器杯である。やや内傾する高台が付いており、底部はヘラケズリによって調整される。杯部はほぼ水平に打ち欠かれており、非常に薄いものであるが、朱墨の痕跡が認められるため、朱墨硯として転用されたものと考えられる。



第9図 4号住居跡及び出土遺物

第2節 土坑・溝跡

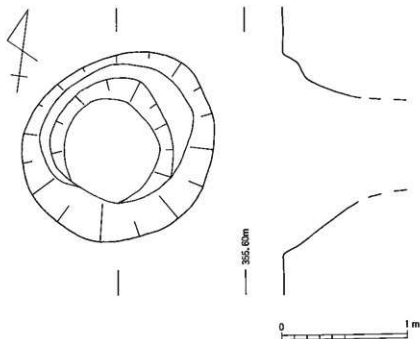
1号土坑（第10図、図版4）

規模：直径約160cm 平面形：円形 新旧関係：2号溝跡より新

構造：井戸跡と考えられる土坑であり、掘方の直径は約160cmを測る。掘方はすり鉢状に落ち込み、検出面下約70cmではほぼ垂直に掘り込まれる。このことから、井戸本体の直径は80cm程度になるものと考えられる。覆土は灰褐色の砂質土であり、地山である黄褐色土のブロックを含んでいる。調査期間の制約から、検出面下80cmで掘り下げを断念した。

遺物：土師器、須恵器の破片がわずかに出土しているだけであり、図化できるものはない。

本土坑からは、明確な遺物の出土はなかったが、覆土の状況から中世に属する井戸跡であると考えられる。



第10図 1号土坑（1：30）

3号溝跡 (第11・12図、図版4・6)

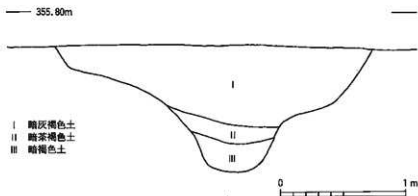
規模：長さ9m以上、幅2.50m、深さ1.05m 平面形：直線

主軸方向：N-40°-W 新旧関係：1号溝跡より古

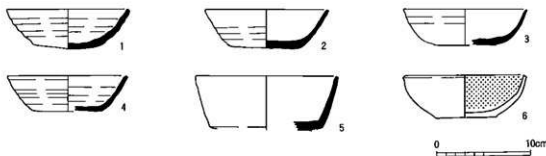
構造：断面は造凸形をしており、溝跡の中程に段を有している。そこから幅80cmほどの細い溝状となり底面となる。覆土は大別して3層に分けることができ、いずれも非常に良く締まった土である。I層は暗灰褐色土、II層は暗茶褐色土、III層は暗褐色土であり、I層が幅広部分の覆土、II、III層が狭い部分の覆土となる。土層断面を見る限りでは水が流れていた痕跡は確認できない。溝の幅は北西側で約2.50m、南東側で約1.70mを測り、南東側に向かって徐々に狭くなっている。調査区と約3mの間隔を開けて平行する形で実施した、都市計画道路一重山線建設に伴う発掘調査では、この溝跡の延長部分は確認されていない。

遺物：溝跡の最下層となるIII層中から比較的まとまった量の遺物が出土しているが、図化できたものは少ない。1～5はいずれも須恵器環である。1の底部はヘラケズリにより調整されるが、2～4には回転糸切痕が残されている。また、5は箱形の体部を呈しており、高台の剝離痕が残っている。6は土師器環である。内面黒色処理され、底部はヘラケズリによって調整される。また口縁端部はやや角張っている。

本溝跡は、覆土の状況や出土遺物から平安時代以前に属するものと考えられる。



第11図 3号溝跡断面 (1:30)



第12図 3号溝跡出土遺物 (1:4)

第4章 まとめ

今回の調査は面積約120㎡という狭い範囲であり、また調査区が幅約4m、長さ約30mと南北に細長い調査であったこと、一部に攪乱による破壊も見られたため、検出できた遺構は多くないが、これまでに城内遺跡の発掘調査で得られた成果を裏付けると共に新たな知見を得ることができた。以下、今回の調査で注目された点にふれ、まとめたい。

城内遺跡を含む屋代遺跡群は、東西に細長い自然堤防上に成立した弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡であり、自然堤防の北側から北西側の縁辺部に弥生時代中期から古墳時代前半期の住居跡がまとめて検出され、古墳時代後半期以降の住居跡は自然堤防の全体から検出される傾向が知られている。今回の調査地点は、自然堤防の中央部に位置しているため、主として平安時代の住居跡が検出されるものと想定していた。調査で検出した住居跡は4棟と少なかったが、いずれも古墳時代後期及び平安時代に属するものであり、想定どおりの結果となった。この傾向は、本調査と併行して実施した都市計画道路一重山線建設に伴う発掘調査で顕著に認められている。しかしながら、自然堤防の中央付近である調査地の周辺にあっても、遺構の確認こそできていないが、弥生時代中期の土器片が検出面から出土している。本調査地点からは、弥生時代中期の土器片を出土したピット群を検出しており、これらのピット群の配置は円形のプランをとっているように見えなくもない。これらのピット群があるいは弥生時代の住居跡など、遺構であった可能性がある。

長野電子工業（株）工場等建築に伴う発掘調査は、今回の調査で5回を数える。これまでの調査で特に注目された遺構に溝跡がある。平成元年度に実施した調査では、「仁和の洪水砂」を覆土に持つ平安時代の溝跡や、中世の溝跡が検出されている。いずれの溝跡も幅が4mを超える大形の溝跡であり、前者は更埴糸里水田址への用排水機能を果たした可能性が指摘されるもの、後者は「城内」の字名が示すように、中世の居館に関連する別跡と考えられるものである。城内遺跡周辺では、これまでの調査成果により、一辺が100m程度と60m程度の規模を持つ堀に囲まれた方形区画が何ヶ所か推定されている。

今回の調査でも、幅2mを超える大形の溝跡（3号溝跡）を検出したが、この溝跡はこれまでに検出された溝跡とは様相を異にしている。今回検出した3号溝跡は、出土遺物や遺構の切り合い関係から平安時代以前のもと考えられる。また、断面形は逆凹形をしており、「仁和の洪水砂」を覆土に持つ溝跡と形態や規模は似ている。しかしながら、3号溝跡の覆土は非常に良く締まった土を基本としており、砂の堆積はまったくなかった。さらに、水の流れた痕跡も確認することができず、水路としての機能は果たしていなかったものと考えられる。また、3号溝跡の延長部分は、平行する一重山線の発掘調査では検出されていない。ただ、一重山線発掘調査現場と本調査地点は3m程度離れているため、その間に溝跡が存在する可能性もあるが、溝跡の一部も検出されないことは、この3号溝跡の規模はそれほど大きくないものと考えられる。3号溝跡と同様の構造を持つ溝跡は、屋代遺跡群内ではこれまでのところ検出されていないため、溝が開削された目的は現在のところ不明であるが、今後、周辺の調査が進むにつれて解明されるであろう。

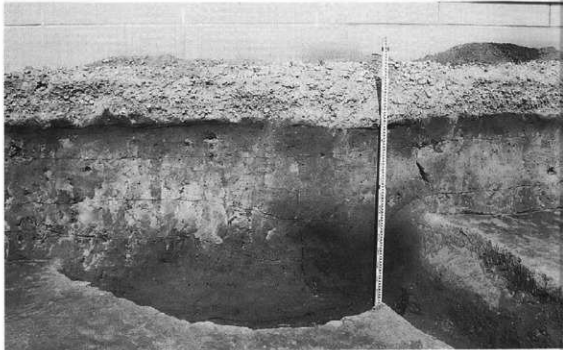
最後に、今回の調査にあたり、関係の皆さんのご協力に深く感謝申し上げます、まとめとします。



調査区全景
(北側より)



調査区全景
(南側より)



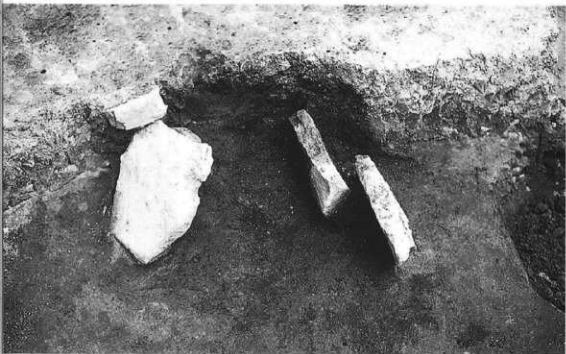
基本層序
(西壁)



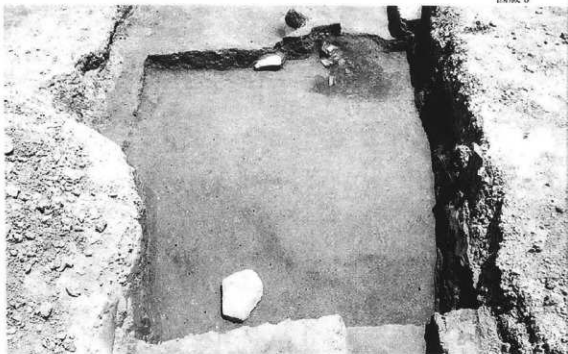
1号住居跡
(南側より)



1号住居跡カマド
(南側より)



1号住居跡カマド
完備状況



2号住居跡
(西側より)



3号住居跡
(西側より)



4号住居跡
(西側より)



1号土坑
(西側より)



3号溝跡断面
(北側より)



調査風景



報告書抄録

ふりがな	やしろいせきぐん しろうのうちいせき はち							
書名	屋代遺跡群 城ノ内遺跡 8							
副書名	長野電子工業(株)工場増築に伴う発掘調査報告書							
編著者名	小野紀男							
編集機関	千曲市教育委員会 文化課 文化財係							
所在地	〒389-0892 長野県千曲市大字戸倉2388番地 TEL026-275-0004							
発行年月日	2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
城ノ内遺跡	長野県千曲市大字 屋代字城ノ内 1351番地ほか			36	138	20060515	120㎡	工場増築
		20218	31-7	32	8	~		
				58	16	20060602		
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
城ノ内遺跡	集落跡	古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居跡 4棟 土坑 3基 溝跡 3基 ピット 6基	土師器・須恵器・ 鉄製品		千山川右岸の自然 堤防上の集落遺跡		

屋代遺跡群 城ノ内遺跡 8

発行日 平成19年3月30日
 発行 千曲市教育委員会
 〒389-0892 長野県千曲市大字戸倉2388番地
 電話 (026) 275-0004
 印刷 信毎書籍印刷株式会社
 〒381-0037 長野県長野市西和田1-30-3
 電話 (026) 243-2105

